

「約束に従って生まれる子供」

2018年10月02日

ローマの信徒への手紙 9章6節～9節 ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。かえって、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

パウロはまず、同胞のイスラエル人にキリストの福音を伝道した。ところが、彼らは頑なに拒んだ。それが、イスラエル人を愛してやまないパウロの深い悲しみ、耐え難い痛みとなった。彼らが信じて救われるのであれば、キリストから離され、神から見捨てられてもよいとさえ言った。それほどイスラエル人を愛していたのである。ところが、異邦人の間でパウロの語る福音が受け入れられていった。キリストの福音は民族の壁を越え、世界に開かれ、信じる者に救いを与える真実があったからである。このため、神の民イスラエルに与えられた神の言葉がイスラエル人に受け入れられないのは、神の言葉が効力を失ったのではないかという疑義を生んだ。それに対し、パウロは効力を失ったわけではないと反論している。

パウロは、「イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない」と言う。パウロは、信仰の「肉」による継承を否定している。Iコリント書15章では、キリストの復活を力強く論じているが、その50節で「肉と血は神の国を受け継ぐことはできず」と、また、ガラテヤ書3章3節では「あなたがたは、それほど物分かりが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか」と書いている。信仰は、肉において受け止めるということとはあり得ない。だから、「かえって、『イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。』すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。約束の言葉は、『来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる』というものでした」と、約束に従って生まれる子どもが父祖を継ぐと論じている。

この記述の背景には、アブラハムと妻サラとエジプト人の女奴隷ハガルの物語がある。サラは子どもが与えられると約束されていながら、なかなか与えられなかった。そこで、アブラハムはハガルによってイシュマエルを得た。その後、約束通り、サラからイサクが生まれた。パウロは、イシュマエルを「肉」によって生まれた奴隷の子と見なし、イサクを約束に従って生まれた自由の子、子孫と位置づけている。ガラテヤ書4章30節、31節で「『女奴隷とその子を追い出せ。女奴隷から生まれた子は、断じて自由な身の女から生まれた子と一緒に相続人になってはならないからである』と書いてあります。要するに、兄弟たち、わたしたちは、女奴隷の子ではなく、自由な身の女から生まれた子なのです」と断じている。この物語の解釈をそのままには受け入れ難いが、神の約束に従って生まれた子どもが子孫となり、神の祝福を受け継いでいくという論述である。パウロにおいて、神の約束は、人間の思いを越え、絶対的な意味と力をもっていると理解されている。